

「閏」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

たち切れぬ青春の日々花芙蓉 八尋 信子

青春時代は、憧れてはつまずいたり、奮闘努力をするも失敗したり。そういう試行錯誤を経て今の自分がある。「たち切れぬ青春の日々」の「たち切れぬ」には、懐かしさも、また忸怩たる思いも含まれている。芙蓉の花に心を委ねている作者がいる。

これよりは花野を越ゆる柩かな 山田 径子

「これよりは」なので、この柩はまだ花野を越えてはいないが、絶対に越えたいという作者の願いが籠められている。遠回りをしても故人に最後の花野を見せたいと。そういう句である。幟を高々と掲げる人、遺影を持つ人、葉缶や供花を持つ人。それに続き棺を担ぐ人たちがゆつくりと花野を縫って行く。仄々として温かい句。

たをやかな草木を描き盆灯籠 山田 雅子

盆を迎えるにあたり盆灯籠を点したり、盆提灯を吊る。この句では、灯籠に描かれた秋の草木を「たをやか」と詠み、心平らにご先祖をお迎えする様子を伝えている。

走り根に足を取らるる秋の園 横須賀智子

櫛や樟、樟などの大樹の走り根には秋ともなると、散った葉が吹き溜まり、そこを跨いだ時には足を取られ、躓いたりもする。ご用心、ご用心。

鳴き尽くし秋蟬虚空に吹かれをり 和田 郁子

法師蟬なのだろうか、早や鳴き尽くしてしまつたその秋蟬が今、虚空に吹かれている。現実の景なのだろうが幻影とも見える。その境目を漂っていて、何か魂のようでもある。一抹の寂しさが漂う不思議な句だ。

うち寄せる乙女の涙桜貝 阿部 草薫

季節を先取りして桜貝という春のものを詠んでいる。海岸に打ち寄せた桜貝が乙女の涙のようであるという文字通り乙女チックな句だが、乙女の涙を桜貝に見立てたことに無理はない。

オルガンの深き溜息終戦忌 伊澤やすゑ

終戦記念日にたまたまオルガンからふが音が聞こえてきた。その音が作者には「深き溜息」に感じられた。負けて悔しいとか、戦争が終りほつとしたとかではなく、勿論、祈りでもなく、無謀だったあの戦争への深い溜息であつたように聞こえたのだろう。

秋蝶の庇ひ合ふがに揺蕩へり 市村 啓子

秋蝶ともなるとその名からして寂しそうで、俳句を詠む方もそのような目で蝶を捉えることが多い。この句のでも、連れ蝶が相見互いで中空をくるくる回りながら飛ぶのを「庇ひ合ふ」と見ている。その視線がやさしい。

愛車モコ泣く泣く棄つる夕月夜 牛込はる子

日産のモコという軽ワゴン車。運転免許を返納するのだろう、長い間乗ってきたこの車をいよいよ棄てる時が来た。使い勝手の良いこの車を手放したのには、余程の決断があつたに違いない。「泣く泣く」は正直な心境。

新米や入荷の前に人だかり 内海 範子

新米が始める前の米不足とパニック。あの時はスーパーの米の棚が空っぽになったことを知り、家族が手分けして米の買出しに。新米の入荷を待ち焦がれたものである。「入荷の前に人だかり」はその当時の世相。都の十月の米の価格は昨年同期より62%ほど上昇した。

白帝の空に松籟ささやけり 大下 壽櫻

白帝は秋の神。松籟は松に吹く風であり、その音。空が秋らしくなり、その空に向かうように松籟が囁き始めた。今夏はかなり暑かつただけにこの風は有り難い。

刀豆なたまめやジャックと豆の木の勢ひ 太田 裕子

刀豆から「ジャックと豆の木」を連想したのでろう。豆の木が高く高く伸び、木に生つた刀豆が弓形の莢を垂らす。「豆の木の勢ひ」に読者はまた連想をさせられる。

木も草も人も色褪せ台風禍 小河原政子

猛威を振るつた台風の数々。山が崩れたり家が傾いたり、折角実つてきた稲は倒伏するし被害は甚大だった。この句では台風によつて色褪せたものとして木と草を挙げ、次いで「人も」色褪せたと詠む。能登地方をはじめ全国各地で起きた大きな災害をあらためて思った。

あつあつの中華もてなす処暑の膳 小野 直美

八月下旬、暑気止息の頃といつても、気候変動著しい昨今ではまだ猛暑が続いていて、とても処暑などとは言つていられないのだが、その暑さには熱いものを食べて抗する。「あつあつの中華」である。中華料理には水に溶かした片栗粉を多々用いるので口中は火傷するくらいに熱くなる。この膳、いったい何の料理だったのでしょうか。

押入れにちちろの鳴くや島の宿 金子かほる

押入れでちちろが鳴くなんて、やはり島の宿らしい。潮騒も聞こえ、ちちろも聞こえ充実した旅だった様子。

老姉妹おにゆーの水着試着せり 金田 知子

NEWに丁寧な言い回しの接頭語「お」を付けた「おニュー」は、新しい物とか新品を指す言葉。『日本語俗語辞書』には「お古」の対語として出来た言葉とも考えられるとあり、「新しいことを自慢する際に使われることが多い」と書かれている。この老姉妹、「おニューよ」と言いながら鏡の前で試着しているのだろう。怖くて愉快。

鉄線花や豪雨の後に花つける 金田 喜子

豪雨が降る前でなくてよかった。鉄線花に触れると、思いのほか柔らかい。ただ満開のときの花の張りは見事で美しい。豪雨が去るのを待つて鉄線花は極上の彩を作者に見せてくれた。その喜びの一句。

鳶めざし羽ばたく鴉天高し 北 好夫

この「めざし」は、鳶を追い掛ける意味の「めざし」なのか、鴉が鳶になりたいと思つての「めざし」なのかが一読して解かりづらい。私は後者を採りたい。と言うのは「天高し」の爽やかな季語を用いているからだ。

夫の手のさらさらとして赤蜻蛉 木山 有衣

「さらさら」は心地良く乾いている様。「さらさら」は手触りが粗く滑らかでない様。この句は「さらさら」で

良かった。さらさらな手に赤蜻蛉が寄つてきて止まつたと理解したが、どうだろう。自分ではなく、夫の手がさらさらであると敢えて詠んだのは一つの愛情の表現であるのかも知れない。

たわわなる桃が地球を引く力 久保田勝一

桃の郷の沢山のたわわなる桃の実から作者は圧倒的なパワーを感じたようで、そのパワーを「地球を引く力」とまで大胆に詠んだ。たわわなる桃の群れはもはや地球から宇宙へと漂い、その不条理な力がこの地球を引く。今回は他に〈寄道し悪阻の嫁に桃刻む〉〈愁ひつつ桃抱へたる少女かな〉もあり、桃への偏愛が顕著である。

パリの月射落とさむとし槍放つ 栗原 季星

今年のパリ五輪の女子槍投げで金メダルを獲得した、北口榛花選手を讃えた一句。放たれた槍が美しい放物線を描いて飛ぶ。作者はその槍に月をさえ射落とす力を感じ取つたのだ。「射落とさむと」の把握よし。

三村へ公平に分け水澄めり 小唄あゆみ

村同士の水争いは各地に在り、江戸時代の古文書にも克明に記載されている。この三村では治水が上手くいぎ水を公平に分け合えているという。「水澄めり」は喜び。

秋暑し髪形を変へやり過し 小泉まり子

憂鬱な毎日を変えるには、先ず服装などを変えてみる
ことだと何かに書いてあった。この句では髪形を変えて
秋暑をやり過ごしている。ささやかな処世であるけれど
気分を変えるだけの価値はありそうだ。

衣被つるんと思ひ出し笑ひ 幸喜美恵子

思い出し笑ひ。過去の不束な出来事がふと脳裡に浮か
び、思わずニヤリとしてしまう。そういうことは誰にで
もあることだ。衣被を剥く時の「つるん」のぬるぬるし
た感触が作者はたまらなく好きなのだと思う。その思
出し笑いを一句定型に巧く納めていて、感心した。

南無の掌を開いたやうな彼岸花 小濱けえ子

南無南無と拝んだ手の平を開いたように咲く曼珠沙華。
彼岸花とも死人花とも呼ばれているだけに、命との関わ
りの深い花である。南無の掌の見立てには実感がある。

新米やあな忘れじの飢餓苦節 小林ゆきお

新米が始める前に米不足パニックに陥った日本。米
大国の日本であった筈なのにと戦前戦中戦後の飢餓苦節
を味わった世代は首を捻る。現在は新米の袋が山と積ま
れているが将来は不透明。「あな忘れじ」を忘れじ。

星月夜私のアランドロン逝く 小林 玲

あの『太陽がいつぱい』のアラン・ドロンの大ファン
だったのか、「私のアランドロン逝く」と、彼を失った哀
しみを直截に詠んでいる。これは言った者勝ちで、うじ
うじ詠むより余ほど心に響く。『サムライ』も良かった。

利酒や後味のよき友とゐて 斉藤久美子

利酒から「後味」の言葉が浮かんだのだと思う。この
句の利酒は、何種類もの酒を友人と試し飲みしたとい
うことなのだろう。その友人との愉しいひと時を終え、酒
も然うだが友人にも後味の良さを感じ取ったのだ。

三匹が二匹になつて秋刀魚焼く 佐藤 和子

家族の一人を亡くされたという。今まで秋刀魚を三匹
焼いていたのが、今年は二匹だけを焼いている。その切
なさが秋刀魚を焼く煙の中に籠っている。

向日葵やしつかりするとくたびれる 島 昌子

残りの人生を頑張ろう頑張ろうとジョギングしたり、
長く歩いたり、体力増強を図ったり。その姿勢は大切だ
が、やはり何処かに無理がある。「しつかりするとくた
びれる」はその実感から生まれた名言で、この句の向日葵
も相当にくたびれている。向日葵と心を通わせた一句。

人情の少し塩味衣被 嶋谷 宗泰

衣被の塩味から話は人情に及ぶ。「あなたは人間が甘い」などとよく人に言われることがあるが、人情の機微に疎いのだろう。苦勞していないのだ。掲出句の「人情の少し塩味」は塩っぱい経験を積み重ねてきた人だからこそ使える言葉。衣被が美味しそう。

薄墨のぼかしも書芸うるこ雲 清水 悠太

光の加減で少し墨色がかって見える鱗雲。作者はその様を「薄墨のぼかし」と感じた。そして、そのぼかしは天の計らいであり、神の「書芸」であると確信した。自然の織りなす鱗雲の芸術品に見惚れての一句。

新米の香やふるさとに繋がる香 正田 和子

素直に表現されている。故郷あつての新米であり、新米の香りである。「香」を二回用いたその韻律の心地良さに魅かれた。

月たひら格差社会を照らしをり 首藤 久枝

格差社会。身分制度が廃止されても男女間の格差や、昨今の正規非正規の格差など矛盾だらけの世の中は変わらない。この句の「たひら」は平等の意に通ずる。月だけは遍く、等しく、格差なくこの世を照らしてくれる。

理不尽に子が消されゆく雨月かな 新海あぐり

かつては貧しさ故の「子の間引き」が行われていた。近現代では国同士や内戦など理不尽な戦争により子どももどんどん虐殺され消されていく。雨月でなく名月の輝く社会でありたい。その願いがこの句から感じられる。

遠雷やマティスの赤の家向う 杉淵真喜子

画家マティスの用いた印象的な赤。作者が見た家もそのマティスの絵を思わせる赤色に染まっていたことが想像される。そこに遠い雷が鳴る。これも誠に印象深い。

夕立のまだ夕立だつた昭和 高橋 章子

「5・9・3」あるいは「5・6・6」の破調の句。温室効果ガスの排出による地球温暖化とそれに伴う海面上昇、線状降水帯などの気候変動は、俳句歳時記の「夕立」の持つ豊かな情感を徐々に壊しつつある。この句の「夕立のまだ夕立だつた」は其処を突いている。昭和の世を懐かしがっているのではない、これは警告の句。

ひたぶるな長月の雨ただ見つめ 高橋満利子

ひたぶるは、ひたすらな様、一途な様。あまり焦らないうでと自らを戒めているのだろうか。晩秋のしぐれのよいうな雨がそのように思わせているのかもしれない。

ハチローの口笛かとも鴉のこゑ 高橋美智子

作詞・サトウハチロー、作曲・中田喜直の『ちいさい秋みつけた』の歌詞に「よんでる口笛 もずの声」がある。鴉の声を聞いた時に作者はその歌詞を思い出したのだろう。ハチローへの敬愛の一句。

木の実落つホップステップドンブラコ 竹森 美喜

ホップステップと来れば後は「ジャンプ」でしょう。それを「ドンブラコ」と見事に肩透かしを食わせた。小川にでも落ちたのだろうが、「ドンブラコ」でこの木の実は生き返った。その後の水の旅も想像でき、和やかで楽しい句となった。木の実は重からず軽からず、川では結構愉しく転がるものである。

子規庵や処々の葉陰に蚊遣香 田中 京

正岡子規門下の俳人寒川鼠骨は子規の存命中も死後も子規のために大いに尽くした。殊に子規逝去後は子規庵の保存に努めた。今私たちが子規庵の庭を見られるのもそういう先人たちが居たからこそ。子規庵の庭は本当に狭いけれど、四季折々にいろいろな草花が咲く。この句の蚊遣香はその庭の「処暑の葉陰」で焚かれている。また、懐かしい蚊遣豚は縁側辺りに見る。病床の子規の気持ちになつて、子規の目になつて草木を見るのも一興。

一隅へまたいちぐうへけふの月 寺田 幸子

名月には雲がつきものだが、そういうものは一切省き「一隅へまたいちぐうへ」とのみ詠む。俳句はどこかにスポットを当て、それ以外の余計なものは景から外す。その模範のような一句である。この名月の美しいこと。

めまとひを鎌もてはらふ女かな 長井 敦子

めまとい（まくなぎ）は糠蚊と言い、糠のような小さい蚊が目の前に現れどこまでも纏わりついてくる。その虫を手を持っていた鎌で払ったというのだから、この女性には勇ましい。野良仕事の最中のことだったのでろう。

坦坦と生きて爪切る敬老日 中嶋きよし

亡くなる前の母の足の爪を頼まれて切ったことがある。硬く、変形した爪だった。自分で爪が切れないのは切ないことであると、その時に思った。それに引き換え、敬老の日を迎えたこの作者は誠実に人生を過してきて、この日も自分で爪を切る。先ずは幸せな人生ではないか。

かりがねや夕日差し込む無菌室 中嶋 雅隆

空を渡つて来る雁と人為的な無菌室との取合せが清新。無菌室のガラス窓に夕日が差し込むというのも綺麗。何か不思議な感じのする句である。

さし色は雲のひといる秋の空 中村 敬子

差し色は、色のコーディネートにおいてメインのカラーの他に、アクセントとして一部に使われる色のことをいう。この句では秋の澄んだ青空がメインの色で、白色の雲がさし色ということになる。秋の空を引き立てるほど印象深い雲を「雲のひといろ」と詠んだことに共鳴。

細く細く松茸を裂いて裂いて 中村 東子

この句は「6・5・6」の破調である。松茸を真ん中に、「細く細く」と「裂いて裂いて」がこれを挟んでいる形。「細く」と「裂いて」が対を為し、それぞれが二度リフレインしている。松茸の調理のリアルが伝わってきて面白い句になった。

懐メロはいつでも夢を敬老日 中村 幹子

敬老の日に懐かしのメロディーを愉しんだのだろうか。「いつでも夢を」は昭和37年（1962年）発表の曲であるから、実に六十二年が経過し、あの頃二十代だった人は現在後期高齢者になっている。「はかない涙を嬉しい涙に」と、これからも夢を持ち続けたいもの。

茸きのこの会は名人揃ひなり 野沢 慶子

「くさびらの会」は全国各地にあるようだ。茸好きが

茸を語ったり、茸を育てたりの活動をしている。会の中には茸博士が必ず居るが、この句では「名人揃ひ」。さまざまな蘊蓄を聞くことができるのだろう。茸を「くさびら」と呼ぶことを私は初めて知った。

積み過ぎのダンブゆらりと夏の果 野村 雅美

不法投棄に出掛けた車ではないだろうが、兎に角、定められた重量以上の荷を積んで発進したダンブカー。高く積んだ分ゆらりと揺れて、作者はそれを「夏の果」と感じた。猛暑の疲れから揺れたものと思えたのだろう。季語の選択が良かった。

流れ星遙か彼方の駅に着き 橋本かをる

流れ星にも駅があるという着想、把握が秀抜。地球という駅、火星という駅、木星という駅というように宇宙全体を流れて行く場面を想像しただけでワクワクする。科学から逸脱した空想だが、そこが楽しい。

億年の水秘すあばた月今宵 橋本 恭子

名月を眺めながら、月面のクレーターの底に存在する「水」を想う作者。地球の水とは異なる形状の水らしいが、その水を探しにロケットを飛ばすなんて、ロマンがある。「億年の水秘すあばた」の表現にもロマンがある。

空蟬や登るをやめぬ足遣ひ 長谷川菊男

蟬の殻は枝を登らない。だが、蟬の殻でなく「空蟬」といつたときに、殻という死んだ物質ではなく、何やら命ある魂のようなものを想起するので、この句の「登る」は少し理解できる。空蟬を登らせているのは作者の童心。抜け殻ではなく蟬の分身と思いたいのだ。

クラス会爺ちゃんたちの夏帽子 長谷部幸子

クラス会。同級生だった男の子たちがみんな爺ちゃんになってしまった！夏帽子だけが若々しく爺ちゃんたちの頭に乗っている。作者はそんな彼らに親しみを籠め「爺ちゃん」と呼ぶ。和氣藹々の会だったことだろう。

戦時下のははのがんばり真桑瓜 畠山 奈於

真桑瓜（甜瓜）は円柱楕円形で、改良され表面は黄色、甘味が多い。掲出句、戦時下で生きて行くために畑を一生懸命耕した母を詠む。真桑瓜も作られたのだろう。「ははのがんばり」に感謝の心が籠もる。

涼新たかすかな風に揺れる草 浜田 優子

秋口の涼しさを草とそれを揺らす風から感じている。草が揺れてはじめて解かったほどの微かな風。そこに新涼の趣を感じ取った平靜な心持ちに共鳴した。

子規庵の色草気ままあるがまま 原田ミチ子

色草は秋の草花のこと。子規の残した「草花帖」（明治35年8月）には、秋海棠、忘れ草、石竹、水引草、桔梗、河原撫子、牽牛花などが描かれている。作者もまた子規を偲び、子規の庭で子規が見ただろう色草を見た。「気ままあるがまま」は横たわる子規の視線を借りての賛辞。

刃先より渦の生まれる長十郎 春田 千歳

長十郎を庖丁で丁寧に剥いている場面。剥いた皮を見て「刃先より渦の生まれる」ことをあらためて発見した。それだけ作者は平常心でいられたということ。写実に徹し、極めてシンプルな句に仕上がっている。作者の新たな境地を見た。

スニーカーとデニム干したり敬老日 平野 豊雄

若い頃からスニーカーとデニムの出で立ちで暮らしていたことがこの句から解る。敬老日、何するものぞ。「老いたり」でなく「干したり」。洗濯干し場に青春が輝く。

胸に本乗せて眠るや天の川 平野 美子

胸の上に、そして胸に置いた本の上に、天の川が輝く。へねむりても旅の花火の胸にひらく「林火」とは異なり穏やかな眠りが作者を天の川にいぎなう。美しい句だ。

夜学生さけるチーズをさかぬまま 本多 遊子

「さけるチーズ」は縦方向に糸状に裂けるチーズで、おつまみとしても食べられている。この句では夜学生がそのチーズを「さかぬまま」でいるという。勉強に忙しいので裂く手間を省き棒状のまま食べたと読んだが如何。「さく」「さかぬ」の些末とも言えるところに焦点を当てた異色の夜学の句。

ひと目見て綺麗なものには毒茸 松本 余一

茸狩の注意を喚起するコピーに相応しい句。見た目の美しさで選ぶと取り返しのつかぬことになるという処世訓に通ずる、毒のある句でもある。

鰻重の人事部長のひとり飯 持田きよえ

一人だけ鰻重を食べていることに気が引け、こつそり食べているのか。人事部長には近寄り難いので誰も寄つて来ないのか。いろいろ憶測の出来る句である。でも、鰻重は場所に拘らない。きつと美味なことでしよう。

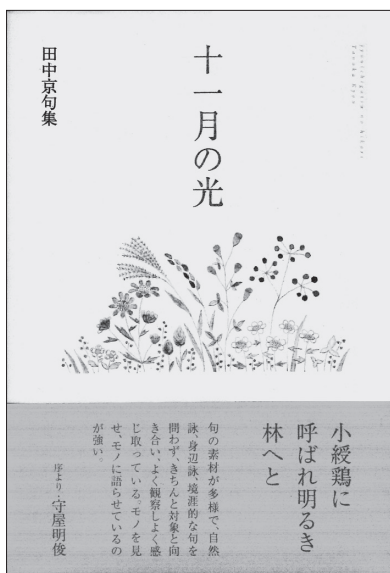
大方は藍の浮世絵秋澄めり 森尻 禮子

藍一色の濃淡だけで刷る浮世絵版画。藍摺絵という。十八世紀半ばに輸入された合成顔料「ペロ藍」を広重や北斎も風景画に用いた。空が澄み富士山もよく見える。

田中 京 第一句集（閏叢書第三篇）

十一月の光

ふらんす堂刊
定価3080円



田中京句集

十一月の光

小綬鶏に
呼ばれ明るき
林へと

句の素材が多種で、自然
体身辺環境のな句を
開かず、きちんと対象と向
き合い、よく観察しよく感
じ取っているモノを見
せモノに語らせているの
が強い。

序より 守屋明俊

■申込み先 田中 京
〒156-0045 東京都世田谷区桜上水二一九-14